

末黒野

すぐろの

9月号
(通巻889号)



団子虫

森清堯

ポケットの入れ替への手間更衣
浦島草遠投めける糸を張り
柿若葉少女の復習ふホルンの音
若葉して桂林の影濃く淡く
著莪の花小谷戸の奥のすべり台
繰る引戸軋む卯の花腐しかな
公園の草刈の香や五階まで
手庇の庭師へ茅花流しかな
女兒ひらく手に団子虫若葉風
バス停の標識を越し立葵
ままならぬ母の看取りや大南風
河口へとたたみ差し来る青葉潮

瑞声

男梅雨

黒滝志麻子
(顧問)

軽暖や竹百幹の風の筋
沖船や茅花流しとなる夕べ
豪農のくらくらまぶし桐の花
知恵伊豆の墓打つてをり男梅雨
今日すべきことけふ終ふる涼しさに
緑蔭のさりげなき距離人と人
墓こゑ途切れたる星の闇
夕風の火照り静むる植田かな

甲矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)

植田

田中臥石

外出自粛残像となる五月果つ
雲流るる空へ一揖春の鷺
桜貝拾ひ歩きの渚べり
再会の言葉を交す立葵
外出自粛耐へて会ひけり紅薔薇
高架線植田に影を落しけり
海ひびく植田の水に夕日泛く
門脇の大甕に咲く水芭蕉
老鷺や自粛解きたる発句の座
生かされてをり筍の朝御飯

新茶の封

森清信子

入院の母待つ庭や花蜜柑
言の葉に拘る詩心朴の花
新茶の封開く御神籤ひらくやう
女学生の誇る脚線新樹光
故郷を追ひても遠し桐の花
ペンテコステに当たる父の忌五月果つ
玉の汗足先空へテコンドー
オンラインの誕生会やさくらんぼ
青春の思ひ出褪せず黴の世に
キャンプの夜明けて仕事の顔戻す

初夏の風

石黒興平

生垣を越ゆるひと枝幣辛夷
寄生木ごとき影なす古巢かな
散策の今日はここまで桐の花
初夏の風牛の鼻づら撫でゆけり
模糊として八十路の夢や明易き
朴の花二十歩退いてまた仰ぐ
存分に夕日引き寄せ麦を刈る
釣師みな言葉少なや鮎の川
到来の筍妻を忙しくす
連れ立ちてクルスの尼僧薔薇館

蚊喰鳥

菅野日出子

池巡る朝の散歩やほととぎす
牡丹を入れて自撮りの定まらず
タクシー待つ街角や夜の新樹
カーネーション友より届くパステル画
朝風呂や隣家の垣の花卯木
住む人の途絶えし旧家栗の花
目に見えぬものへの怯え蟻地獄
寝付かれぬ夜や茉莉花の何処より
春くや墓地を罫の蚊喰鳥
十一鳴く寺の隣りに住み古りて

薔薇満開

岡野里子

新緑や時折届く風の私語
猫額の庭や海芋の花あかり
薔薇満開礼拝堂の扉の堅く
門柱の魔除の獅子や棕櫚の花
マーガレットの囲む六角ログハウス
雲流るフェンスに絡む鉄線花
蜘蛛の囲や霜の花めく雨の粒
雲の峰岸の風車は風を待ち
晚鐘の余韻にこもる薄暑かな
食卓の窓の満月メロン切る

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



紫陽花 堺 昌子

鶯のしきりとなりて森深し
早咲きの梅に実の早や遊歩道
梅の実や孫嫁連れて挨拶に
麦の穂の出揃つてをり風渡る
海老海老と指さす母子子供の日
山畑のところどころや姫女苑
老鶯の二声三声途切れつつ

鎌倉吟行 齊藤マキ子

蛍の火 高木邦雄

標識の海までの距離大南風
紫陽花の色を称へて大巧寺
炎昼や憤怒あらはに邪鬼の面
日覆の端のはためく今小路
寿福寺へ岐るる道や揚羽蝶
病葉のたゆたふ水面平家池
土牢の真昼花椎匂ひけり

初蛍水面に落す火のあえか
線描の画布は漆黒蛍の火
白薔薇やまばゆき朝の風あまき
江ノ電の窓を吹き抜け若葉風
大過なき一日暮るるや冷し酒
蛇籠より子蟹を放つ早瀬かな
菅笠の翁早瀬に籜を打ち

菊挿芽 長尾タイ

滴り 及川照子

祖父の忌の重き家訓や菊挿芽
十葉や憂さを解きたる白き闇
小判草黄金の影を零しけり
連邦の墓地寂寂と紅薔薇
緑蔭や嬰の熟寝の乳母車
桑の実の二粒三粒里ごころ
故郷の山紫水明梅雨夕焼

外出のままならぬ日の薄暑かな
新刊書を抱ふる帰路や風薫る
豊作の日を願ひつつ袋掛け
山寺の百丈岩の滴れり
河骨のまだ目覚めなく尾瀬の朝
梅の花雨の静けき上高地
つなぐ手の愛の深みや恋蛍

夏鶯 今村千年

夏帽子 大川暉美

見交はずや夏鶯の啼くたびに
佇めば薔薇の香りと潮の香と
夏マスクにところをそつと仕舞ひ込み
紫陽花の四片ととのふ疎水べり
疎水べり憩へば増ゆる蛍かな
蛍火の舞へば美し草の家
着倒れの京都有ちの暑さかな

餌を待つ嘴三つ四つ燕の子
燕の子未知の空へと巣立ちけり
夏潮や光を抱く帆碑一基
沖の帆へ眼遊ばせ夏帽子
ジーパンの穴はファッション風青し
十葉の蔓延り谷戸のパーキング
ざりがにを釣る子や眼輝かせ

青炎集

森清 堯選

横浜 平木三恵子
時の疫を避くる籠居や夏兆し
くるくるとたこ糸解くる粽かな
母の日や紙工作の花の束
ヨーグルト庭の苺の三粒入れ
芍薬やまろき蕾の解くる朝
首長の一輪挿しやこやすぐさ

横浜 布施由岐子

横浜 岩上行雄

居酒屋の五目鮓買ひ散歩途次
夏雨や明日の用事を箇条書き
朝刊のバイクの音や明早き
楊梅のかくも落つるか青きまま
白靴や判子不要と宅配便
薫風やかつぽかつぽと下駄の音

三鷹 小林清彦

横浜 田中春江

頑なに生くるも可なり櫟落葉
胡麻蒔くやサプリメントを飲みながら
縫るもの見つからぬ蔓梅雨晴間
蟠り宿さず滝の潔き
辿りたる袂は何処虹の橋
蟻に問ふ今日の歩数の値など

はやりうた齟齬のかなしき桜桃忌
鶉の嘴のきらきら杭の上
緋鯉らになだられてゐる手ぶらかな
五線譜の絵皿の涼しミュージアム
芒種かな武州の郷の古る農具
住む人は何処へ梅の落ちしまま

横浜 芝田幸恵

大網白里 岡井マスミ

格子なき牢獄めける清和かな
髪染めて出づマロニエの大通り
マニキュアの色なき色や半夏生
くづれゆくときの美しき氷
昼顔やそれは途方に暮るる色
修羅あらば修羅を鎮めむ花ダチユラ

青葉風明日あることを疑はず
吊床のころもとなき庭木かな
葉隠れの大山蓮華匂ひけり
回り道うはさに勝る薔薇百花
一雨に逆巻き生まれ夏の水
六月や雲なきひと日授かりぬ

浦安 東正則

横浜 滝沢いみ子

蚊の声や思はず叩く右の頬
葉桜や令和に頼む遠き道
白杖の人に手を添へ白丁花
梅雨寒やヨットハーバー音も無く
乾杯の天抜くる声ビヤホール
丸裸飛び込み浮ける少年期

横浜 有賀鈴乃

横浜 鍋島武彦

初夏や手くばに受くる化粧水
朴散華飛行機雲のほだけたり
薫風や風車望みて深呼吸
雨あとの海芋の立つる白帆かな
梅雨晴や人隔つとも化粧せり
捨て難き亡夫の日記夕焼雲

時節柄ことに気になる夏の風邪
金魚掬ひわれはおけらも子は十尾
金魚玉背に遠き雪の富士
時の日や片手余るか我が余生
四阿に茶をいただきぬ苔の花
早苗田や溢るばかりの信濃川

耕 土 集

岡野 里子



不自由と自由のあはひ春夕焼
入口の手指消毒夏に入る
海風の巡る薔薇園足早に
鼻歌のやうに羽音や新樹光
プランターの幼虫育つパセリかな

横浜 大内 由紀

霧や気急く過ぎる遊覧船
不意の風弾みつきたる手毬花
山里も富士も隠して樟若葉
青葉騒会話無用の遊歩道
野あやめや信濃路しのぶわが庭に

横須賀 久保寺眞佐子

白蓮の命ささげて空映し
夏の満月我百歳と八ヶ月
青天の生命輝く若葉かな
雛五羽の大きく巣立つ燕かな
梨農家の粒を摘みぬ夏の空

川崎 宮地 静雄

啓蟄や錆びたる鎌の納屋の隅
住みし地はどこも古里初桜
灯台は真白が似合ふ鳥雲に
山吹やかたて防人抜けし森
つつじ燃ゆ児ら通学の道の脇

横浜 和田 啓

藤椅子にある考の音妣の音
夕立の水玉模様沈下橋
若葉風後ろめたさの夕散歩
縞模様夜の光の簾こし
密いふ言葉をなぞり青葡萄

町田 中野千代子

春風へエンジン軽き新車かな
緑立ついくたびポスト見にゆかむ
久々のミシンや春のマスク縫ふ
紫蘇入りの餃子や進む缶ビール
薔薇園に響く亭午の汽笛かな

横浜 津野 桂子

三叉路の渋滞しげく春埃
持てるだけ買ふ産直の春キャベツ
はんなりと京の弁当春の雪
華やかにライト浴ぶるも花淋し
春泥や野を駈くる駒息粗く

横浜 与田 幸江

心地よき甘口ワイン春の宵
春の庭一つ一つに立つ名札
ミモザ咲く橋の袂の美容院
スイッチの切替忙し春炬燵
小流れの音に消えたり春の雪

横浜 杉山くみ子

子等と剥く莢豌豆や声弾け
たまに会ふ素直な笑顔子供の日
母の日の花に添へたる句集かな
松籟や五月の雨滴輝やかす
この川は町のシンボル桐の花

横浜 岩崎 藍

駅前小菜の花畑乳母車
鶯のいつもの朝や谷戸の空
ウォーキング茅花流しの土手に沿ひ
青蔦やシンメトリーに這ひ上がり
雷鳴に猫の戻り来三日ぶり

横浜 村田 敦子

竹の皮脱ぐや小さき音たてて
御符揺るる寺深閑と大牡丹
子鴉の尾を振り歩む鉄路かな
サクサスの音色に遊ぶ若葉風
もじばなの我を通し抜くねぢりかな

横浜 喜田 君江

薄紅の童女の頬や花水木
麗かや天に胸張る風見鶏
春暑し話し相手は良人のみ
人影の動かぬ町や鯉幟
老鶯の思はぬ近き朝厨

横浜 秋山 文子

屋根を越す櫻若葉や雨上り
路を剥く黄緑の香を走らせて
葉桜や角なき空の広ごりて
雨の糸解れてやはき菖蒲かな
若葉風幼児にもどる童歌

横浜 小池 桃代

日脚伸び明き厨の古時計
未央柳静かに揺るる日暮れかな
春風やスカーフ灰と去年の香
ふと猫に見据えられをり春愁
諦めと悟りのあはひ牡丹散る

横浜 石田 朝子